
手紙 ~To you of dear~

姉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手紙 To you of dear

【Zコード】

Z9612E

【作者名】

姉子

【あらすじ】

パソコンや携帯でのメールが主流になり、今や手紙なんでものが古臭くなってきた時代。そんな時代のいろんな手紙。持ち主の想いを、きっと手紙は優しく伝えてくれる。

それは突然だつた。

俺は妙にテンションが高くて、両手放しで自転車をこいでいた。あまり得意ではなかつたが、登下校の道で慣れていたし見通しもよかつたため何度もしていた。そんな俺に、あいつは「いい加減にしろよ」と呆れ口調で注意を促した。そんなこともお構いなしにこいでいた俺は、ふつとバランスを崩した。

そこに丁度加速したトラックが通りかかつた。

後はあまり覚えていない。でもその瞬間に、「馬鹿！」と叫ばれながら物凄い勢いで突き飛ばされたことは、力の余韻が残つていて覚えていた。

気がついたらあいつは血だらけだつた。

トラックを運転していたおっさんが青い顔をして駆け寄つてきて「大丈夫か？」と駆け寄つてきた。はい、と答えると倒れているあいつをちらちら見ながら電話をし始めた。少し後ろには原型を留めていない自転車と、少しがこが曲がつた俺の自転車があつた。誰か知らないおばさんが「今救急車来るからね」と心配そうに俺に言つた。その間、俺はただいろいろな人間に取り囲まれていくあいつをボーと見ることしかできなかつた。

俺はたいしたことなかつたが、一応一緒に救急車に乗つて病院に向かつた。救急隊員の人人がいろんな機械をあいつに取り付けていた。それでも俺はどこか冷静でいた。

病院に着くと、早速あいづは奥へ連れて行かれた。
まるでドラマを見ているかのようだった。

一緒に手術室に行こうと思つたら、看護婦が「手当てしようね」と
言つて微笑んだ。そしてやんわり掴まれた腕に、電気が走つたかの
ような痛みを覚えた。医者に見せたら「痛くなかった？折れてるよ
？」と笑いながら言われた。はあ、と答えると、医者はもう一度笑
つて「このまま入院ね」と言つてカルテとかいうのを書いていた。
その後は、看護婦に言われるまま着替えさせられベッドへ寝かさ
れた。

「お友達が心配？」

せかせか準備をしてながら、看護婦は俺に言つた。あいづは、と聞く
くと「まだ手術中」と言つて少し困ったように笑つた。

「家の人もうちょっとしたら来るからね」

俺なんかにぺこっと頭を下げ、看護婦は出て行つた。それから10
分後ぐらいに、泣いているのか怒っているのかわからない母親が勢
いよく病室に入つてきて、それはまあ手加減なく俺に平手打ちをし
た。

「心怪我人なのに。

「」の馬鹿息子」

「落ち着いてくださいお母さん」と囁つ看護婦を尻田ヒロ、さやひつと俺を抱きしめた。骨が軋む音が聞こえた。経験したことのない激痛に意識を奪われそうになりながら、俺は母親の暖かさを嫌というほど感じた。

それから数日後、やつとあいつは集中治療室から一般病棟に移ることになった。しかし意識が戻る気配はなかつた。俺は、ギプスをした腕のまま、あいつの病室へ向かつた。ずっと行くけなかつたあいつの元へ。やけに重いドアを開けると、部屋には母親らしき人がいた。あつ、と口から思わずこぼれ俺は頭を下げた。

「もしかして・・・水木君？」

俺の母親とは違つて、優しくて落ち着いた声に俺は顔を上げた。

「心配して来てくれたの？ ありがと？」

俺は微笑むその人に責められているかのような気になつた。すみませんと言つても許されるようなことじやなかつたが、そんな言葉しか思い浮かばなかつた。何度も何度も言つたびに、涙が止まることを知らないかのように流れ続けた。自分のしたことの大きさに後悔し、今更ながら痛感した。

もつと罵倒してくれれば。
もつと蔑んでくれたら。

ほんの少しだけ楽になれたの。」

それを許さないかのよつこ「もつこいのよ」と言つて、ガキみたいに泣きまくる俺をその人は抱きしめた。

それから俺は、眠るあいつの隣にあつた椅子に静かに座つた。本当に眠つてこるかのようだつた。

「あの、紙と鉛筆ありますか?」
「何か書くの?私が代わりに」

右腕を吊つた俺を心配する人に、俺は軽く首を振つた。

「自分で書きたいんです、お願ひします」

そう言つた俺に、小さな紙と鉛筆を渡してくれた。初めて左手で書いた文字は、あまりにも下手くそだつた。それでも俺は、時間をかけながらも全部書きあつた。

田がやめたらおひつてやるよ

それだけ書いて俺は手を置いた。気がついたら額に汗が滲んでいた。

「これを、田が覚めたら渡してくれませんか?」

俺の震える手を握りながら「必ず渡すわ」と言つて、その人は微笑んだ。お願ひします、と言つて入つてきた時より探く頭を下げ俺は病室から出た。長い廊下を歩きながら思い出されるのは、あいつの機嫌の悪そうな顔ばかりだった。

泣きすぎて腫れた目に日差しがあたる。俺は少しだけ立ち止まり外を覗いた。木々が、風に揺らされていた。
そしてまた俺は涙が止まなくななり、歩き始めた。

あれはどいつも考へても向こうが悪い。委員会で一緒に女の子とひょっこ話してたからって。やきもちはよく焼くとは思つてたけど・・・ここまで焼かれたらけりと驚きだ。しかも一旦不機嫌になると、これがなかなか直らない。

「なあ、やうそろ機嫌直せよ」

とつあえず無視。聞こえていいかの如く無視。一緒に帰りながらもこの沈黙はかなりきつかった。口はきかずとも、「一緒に帰ろう」と言つたら玄関で待つてくれたから「直つかな?」と思つていたのに。

「あれは明日の委員会のことでちょっと話してただけだって

必死に話し掛けるも無反応。俺はだんだん腹が立つてきた。

「なんだよ、そんなに怒なくとも」

少しだけ声を強くしても、それでも無視。俺は諦めて黙つていることにした。そして、そのまま別れの挨拶も交わすことなく家に着いた。

「俺他になんかしたかなあ」

かばんを机に放り投げて、体をベッドに投げ出した。制服を着替えるのもなんだか億劫で、俺は他の原因をひたすらに考えた。しかし、俺は何一つ悪いことなんてしていない。

一日を振り返ってはみたものの、何も思い当たる節はなかった。

一日が駄目なら、昨日おとといも考えてみたがやっぱり何もない。俺はとりあえず起き上がった。そして、滅多に向かわない机の椅子に腰掛けた。紙とシャーペンを手にして。

「うーん・・・これでいいか?」

書き終わつたころに一階から母親の「い飯よー」という声が聞こえ、それに返事をしながら俺は部屋を後にした。

次の日、引き続き無視し続ける彼女の手に無理やり昨日書いた紙を渡した。不機嫌だった彼女は、眉間に皺を寄せたり赤くなったりしていた。

「・・・あんた馬鹿じゃないの?」

呆れているのか、なんなのか。でも久しぶりに見た彼女の笑顔は相変わらず可愛かつた。

「ねつ、仲直りして？」

手を合わせ、必死に懇願した。彼女はそんな俺を見てちらりと笑い始めた。最終的には腹を抱えて大笑いだ。
俺は情けないといつか恥ずかしいといつか。

「くさいけど・・・許す」

呼吸を整え、笑いすぎて出た涙を拭いながら彼女は言った。俺はほつとして長い溜め息をついた。

「でもあんたが悪いんだからね」
「それだよー・・・俺なんかした？」
「うわつ、まだ気づかないんだ」

彼女は再び眉間に皺を寄せた。
しまった、と思っても後の祭り。

「もう知らない」
「うえ、勘弁してくれよ」

そして俺は振り出しこ戾つた。きっと俺は一生彼女に勝てない気がした。

あーあ、俺はこの先何回彼女に「愛してる」って手紙に書くんだろう

う?

浮氣すんなよ

浮氣は男なら誰でもするというが、あいつはあまりにもしそぎだつた。5日に1回は女をホテルか家に連れ込んでいた。

それもいつも違う女。鉢合わせになることもしばしばだつた。

情報を聞き入れるたび「あたしつて本当に恋人なのか?」と考える日々だつた。それでも別れられなかつたのは、多分相当私が惚れ込んでいたから仕方ない。「ごめんな、もうしないから」という言葉をいちいち信じていた。

しかしそれもいつしか限界に達し、とうとう2年前の冬に別れた。クリスマスを目前にしていたが、あたしは我慢できなかつた。それにクリスマスにあいつはバイトを入れていた。

恋人同士の一大イベントだというのに。

「仕方ないだろ、今日バイトだつた奴が葬式があるつて言つんだから

嘘に決まつてゐるではないか。

話によると、数日前に父親の兄弟の息子の友達の祖母が死んだと言う。あんまり関係ない、というかむしろまったく関係ない。どうせ彼女にでも「明日はバイトなんか入れないで」とでも言われたんだろうに。

嘘臭い嘘に簡単にだまされやがつて。それに、クリスマスは一緒になんてあたしも望んでいた。あいつはあたしより友達とバイトを選んだのだ。

「もういい、別れよ。ばいばい」

「待てよ」と言いながらも、彼は追ってはこなかつた。

あまりにもあつさりした終わり方だつた。つまりはあたしたちはそこまでの関係だつたつてこと。あいつにとつてあたしはどうでもよかつたんだ。そんな男にいつまでも縋り付いていたあたしが馬鹿を見ただけつてこと。おかしすぎて道の真ん中で「ははっ」と笑つたら、通りすがりの人があたしを一瞥して去つていくのが何度も見えた。そしてあたしは雪がちらつき始めたとき、何の恥じらいもなく大声で泣いた。

思つていたより傷ついていることに驚きながら。

それから1年半後、私は結婚した。

号泣するあたしにハンカチを渡しながら「大丈夫?」と言つてきた彼と。よくあんな状態のあたしに話しかけたものだ。付き合い始めてすぐ彼に聞くと、「可愛かつたからかな?」と笑つた。あたしはもうこの人しかいないなと思つた。物好きもいたものだ。

それから早くに彼の両親に紹介され、あたしも両親に紹介した。どつちの親にも彼は「結婚を前提にお付き合いしています」と言った。あたしは「律儀な人だな」と思いながら密かに喜んでいた。

半年後、あいつから結婚式の招待状が届いた。
忘ることのないあいつから。

綺麗な字だつたから、きっと奥さんが書いたんだろう。あたしは日時を見てからカレンダーを見た。予定は入つていなかつた。

とつあえず相談してからにしようと思い、それを机に置いた。瞬間ある言葉が小さく隅に書かれていた。

「悪かった」と汚い字で一言。

相変わらずというか。

あたしはあの時のように「ははつ」と一人笑つた。「どうした?」と彼が新聞から目を離しながら聞いてきた。「何でもない、愛してる」と言つと、「俺も」と聞こえた。驚いて彼のほうを振り向くと、ただにこにこしていた。いつも相変わらずであたしはもう一度笑つた。

あたしは彼に「友達の結婚式があるんだけど」と言つと、「行っておいでよ」言つて微笑み再び新聞に目を向けた。「一緒に行かない?」と言つと、「何日?」と聞かれた。

「再来週の日曜日」と言つと、彼は「いいよ」と言つて新聞を机の上に置いた。そして近づいてきたかと思つたら、後ろから抱きしめられた。

「暑いからやめてよ」と言つと、「いいじゃん新婚だし」と言つて首にキスしてきた。あたしはぐるっと向きかえつて、彼の口にキスした。「浮氣すんなよ」と言つと、「新婚だし、まだ当分しない」と彼は言つ。

「あほか」と言つて、あたしはもう一度キスした。

突然だけど

授業中、まともに起きてはいない。何のために学校に来ているのかと問われると、きつと「あ？」と言つて首を傾げるだらつ。あいつはそんな奴だ。

「であるからしてー・・・つて、なんだお前、珍しいな」

驚きながらも、嬉しそうに教師は誰かに向かつて話しあがけていた。周りの生徒からも「珍しー」とか「雨が降るぞー」とか言つ言葉が聞こえてきた。後ろを振り向くと、そう、あの万年熟睡男が起きて何かを書いていた。

「俺は嬉しいぞー」んなにも教師をやつしていくよかつたと思つた日はない

たかが起きているだけだというのに。どれだけあいつはこの教師に苦労をかけているのか計り知れない。しかしそれも束の間、またしてもあいつは眠りの世界へと旅立つたらしい。教師は「またか」と言つて、本当に残念そうにしたがすぐに授業を再開した。切り替えが早かつたが、それでもどこか寂しげな後姿だつた。

「ねえ、不動さん」

とんとんと肩を叩かれ後ろを振り向くと、一枚の紙が渡された。

「石井から

そう言って彼女はくすぐすと笑った。わけがわからず私は紙に書かれている内容を読んだ。

突然だけど好きです。
付き合ってください。

石井

バツと後ろを振り向くと、少し小さくなつた彼が見えた。耳が真つ赤だった。

「どうした不動？顔が真っ赤だぞ

そしてそれ以上に、私は顔が赤かつたようだ。教師は不思議そうに私を見た。いつの間にかクラス中に知られていたのか、「先生諸事情よー」とか「すげー」などという言葉が聞こえてきた。それでもわからない教師は、その時間中不思議そうに私やあいつを交互に見ていた。

突然だけど（後書き）

2年程前の作品です。ちょっと（だいぶ？）直しました。いやーたまりませんね。何これ？！というのが多かつたです。なんとなく直しきれてない感じもしますが、それは温かい日でお願いします。

実は手紙～To you of dear～もありますので、そつちも修正でき次第HPします。まあとりえず・・・これは新しいから！中途半端じゃないな、うん！

ああ・・・もちっとがんばるわ。

それでは、ここまで読んでくださってありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9612e/>

手紙～To you of dear～

2010年10月28日13時58分発行